目次

日蓮聖人の慈訓……本多日生
立正安國論講話（第三講承前）……小林一郎
本佛の宗教（綱要四）……河合陟明
記事
○本部團報　○福島教信　○入幌報告

第四十九年　三月號

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間內ニ佛祖正眼ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歷史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自覺會アリ又知法思國會等アリ其何頭宜傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聚語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト敎トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ遂ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ終來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セントスル　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正眼ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文敎ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト敎化トヲ守持スル事是レナリ

敎旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ

茲ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル敎學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　願クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團畧則

□目的　本團ハ日蓮敎學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正眼ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根抵ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布敎並ニ敎化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス

□維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

□賛助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス

□正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルル方ヲ正團員トス

□入團　御希望ノ方ハ住所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス

□誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

日蓮聖人の慈訓

本多日生

一、聞を本と爲す

『日蓮聖人の慈訓』と題して、信仰に關する大聖人の慈愛深き御敎訓を御紹介しようと思ふ。聖訓の中に『法華經は專ら聞を以て本と爲す』と仰せられて居るが、卽ち敎を聞くことが一番大事なことだといふことをお示しになつて居るのである。これはたゞ法華經に限る譯ではないので、人間が大切な事柄を覺えようとするには、耳を通して聞くより外はないのである。人間の感覺は六つあつて、眼と耳と意と鼻と舌と身、この六感といふものに依つて人間の感覺は働いて居るのであるが、その內で鼻と舌と身といふものは、道德宗敎のやうな精神生活の方面の高い事柄には一向效能が無いものである。その高い生活に關係の有るのは眼と耳と意の三つである。ところが意は最も効能のあるものには相違ないけれども、深い大事な事柄を自分で發明するといふことはなか〳〵出來ない。そこで他に依つて學ばんとする場合に於ては、眼を通して知ることゝ、耳を通して知ることの二つになるのであるが、その場合に眼の方は、實際の物に就て言へば形に現はれて居る事しか判斷することが出來ない、所謂眼に見えない事といふものは、眼に依つて知ることは出來ないのである。そこで人間の心であるとか、佛樣とか神樣とかいふ問題になれば、眼は一向役に立たないので、如何に良い眼でも人の心を見ることは出來ない。神佛を見ることも出來得ないものであつて、たゞ物質的の形を有つて居る物しか人間の眼はこれを見ることが出來ないところが耳はどれ程高い事柄でも、その意味合を敎はればこれを聞き分ける力を有つて居るものである。それ故に最も深い事柄は耳に依つて知るより外に仕方がないのである。

これは人間の感覺に就ての原則がさうなつて居るのであつて、一つもこれに除外例は無いのである。必しも宗敎に限つた事ではない深い學問をしようと思へば、どうしても耳に依つて學ぶより外ないのである。それ故に孔子が論語に述べて居る事でも、

『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』

と言うて居るので、卽ち「聞」といふことが最も大事なことになる譯である。釋迦如來が五十年の間說法敎化をせられて法を說かれたその「說」といふ語に對するものは「聞」といふことである。聞法卽ち法を聞くといふことに依つて衆生を濟度せられるのである。法

を說かず法を聞かざるに於ては、深い教といふものは成立つものでないのであるから、聞くといふことが一番大事なことである。殊に法華經は專ら聞を本と爲すと言はれて、最も深い意味合を法華經は說かれたものであるから、佛樣の事に就ても本佛の實在といふ大事なことになり、人間の心に就ても心の尊さを十分に說き切つて、十界具足の妙體である、その心の微妙なる意味合は一念三千であるといふやうなことになつて來れば、どうしても耳を通してその教を聞くより外はないのである。要するに法華經は高い教であるが故に、耳を通してこれを聞かざるに於てはその意味合を知ることが出來ない。故に迹門の法は、舍利弗等がどうぞお說き下さいと言うて懇請已まざるに於て漸登がこれをお說きになつたのであるし、本門の法は、彌勒菩薩等が懇請已まざるに於てこれをお說きになつた。その說かれたのを聞いて、迹門の利益は卽ち迹門を說かれたその教を聞いて得たことであり、本門の利益はやはり本門の教を聞いて得た事である。それ故に「佛說かざれば彌勒たれか諦し」と申して、彌勒菩薩といふ最も高い位地に居る菩薩であつても、佛がお說きなさらんければ深い事柄はわからぬといふことになる。どういふ根本の所に戻しても、教を聞かずして勝手に信心したり、勝手に考へたりしてやり居る所には大體間違ひが起り易い事である。今日は人間が慢心して來たから、「ナーニ俺か……」といふやうなことでやるけれども昔から「智はぬ經は讀めぬ」と言つたが如くに、この深遠なる佛の教、殊にその眞實の法華經の妙理に至つては、これを讀んで拜聽するより外ないのである。その事を日蓮聖人は「聞を以て本と爲す」と言はれた。

ところが教の養へる時は卽ち說くことが養へ、聞くことが養へるのであつて、例へば日蓮門下に就てのみ考へても、日蓮聖人の教が振ふか振はないかといふことは、その教を說くに適當な人があり、熱心な人が有るか無いか、聞く方に於て又熱心に聞く人有りや否やといふことに依つて、その教の感應といふものは直ぐにわかる譯である。ところが悲しい事には說く方にも良き人少く、熱心の人少く、聞く方も同じやうなことになつて來て居るから、日蓮主義は今日勃興すべき機運に向つて居りながら——卽ち社會の事情環境は、日蓮主義が非常な勢ひで擡大になるべき狀態に滿ちて居りながら、而もこれを說き、これを聞き、而して協力して行くべき僧俗の間の力といふものが非常に微弱な有樣に在ると思ふのである。吾輩は不肖ながら多年その事に努力し來つたのであるが、どうしても說く方の法師に良き人を得、聞く方の信者に良き人を得て行かない限りには、如何なる良き教ありと雖も用を成さない譯である。

それが大聖人の慈訓に於て最も大事な事であると考へる。故に日蓮聖人の如きは鎌倉の街頭に立つて辻說法をせられたのである。今日では道路布教といふやうな事も珍しくもないけれども、鎌倉當年に於て寺院殿堂の外に出て、人の往來をするところの大町小町の辻に立つて聲を張らして法を說かれた如き、又その教を聞いて熱心に信ずるのみならず、教の爲に盡した多くの信者達のあつた事を考へるといふと、如何にも日蓮聖人が教の爲に盡される態度といふものは明瞭な事であつて、今更教を說くことに不熱心であつたり、教を聞くことに不熱心であるところの日蓮門下の僧俗の態度は、明瞭に間違つて居ると思ふのである。

二、隨喜見聞、主伴となる

さうして教の事柄といふものは、緣ひ自分が相當に心得て、大體の話はモウ聞かなくてもわかつて居るといふ風に、所謂教義上の或る程度の事柄は卒業したやうな位地になつて居つても、それで安んじてはならないものである。何も知らない事を始めて教はるといふ爲にのみ法は聞くべきものではない。知つて居る事でも、その心持が稀薄になつたり、養へたり、氣が拔けたりする場合に、これを繰返し〳〵聞くことに於て、又その氣分を新にし、熱誠を加へて行く爲に、教といふものは聞かなければならないものである。だから知らない事を教はるのではない。「モウその事は何度も聞いて知つて居ります……」と言ふ、知つては居るだらうけれども、併しそれが爲に信仰の熱が果して持續されて行き居るかどうかといふことになると、なか〳〵一通り知つて居るからと言つてそれで安心して居ることは出來ない。

それ故に善き事柄は互に語合ふといふことが大事ナンである。忠臣藏の事柄でも皆んな知つて居るのだからと言つて駄つて居つたならば、別段に忠臣藏の事に感興は湧かぬけれども、幾たびも繰返しその話をし合つて、大石良雄が斯ういふ風に苦勞をした、斯ういふ場合には斯ういふ事をやつたといふ風な事を、兩方が知つては居るけれども、更に語合へば、その心持といふものがそこに蘇つて來て活きた力を現はすのである。例へば親孝行の事柄も、その人の話は能く知つて居るといふ場合でも、その話を繰返すことに依つてやはりそこに孝養の氣分といふものが活きて來るのである。宗教の教義、信仰の事柄といふものも、兩方が能く知つて而もそれを語合ふ、日蓮聖人の龍の口の法難の話の如きは、苟も日蓮門下である限りは誰しも能く知つて居るけれども、それを話題として「さうだ、その時に日蓮聖人が『くさき頭を法華經に捧げて』と言はれた」「ウン、さうだナ」といふ風に、兩方が能く知つて居る事だけれども、それを語れば更にそこにその時の氣分が力强く蘇つて來る譯である。「知つて居るからモウそんな事は聞かなくても宜しい」といふやうな心持で居るといふことは、教に就ての考の足らない譯である。

『隨喜見聞恒に主伴と爲る』

といふことを、妙樂大師が法華經の講義の終りに書かれた、その事を日蓮聖人が『一代聖教大意鈔』に引かれて居るが、これは非常に大事な事である。自分の感心して居ることを互に語合つて、或る時は自分の方がわかつたやうな顏をして話す時もあるし、又或る時は自分が聽衆の方に廻つて「成程さうですナ」と言つて話の相槌を打つて行く時もある。さういふ風に信者は互に主となり伴となつて語合つて行くべきものである。その事が最も能く發達することに於て自分の信仰も固まり、又教の勢力も伸びて行くと思ふのである。

これは現在世の中に行はれて居る盛大なる宗教に就て考へて見ると、必ずさういふ風になつて居ると思ふ。基督教などは比較的その

教の意義が能く行渡つて居るやうに思ふのであるが、彼等は聖書に就ても、その教の大事な事柄に就てはお婆さんも知つて居れば娘も知つて居る、さうして家の内に於ても折に觸れて互に話合ふといふ風になつて居るやうに思はれるのである。一家團欒の席に於ては「知らない子供は聽きなさい、それは斯ういふ譯です」と言つてお婆さんが話かける、さうして何か用事が出來て席を立つと、あとは嫁さんが代つて話を續けて行くといふ風な事になつて居ると思ふ、それが非常に大事なことナンである。ところが日本で能く聞くのは「私は家は禪宗ですけれども何も知らぬ」と言つたり、「私は先祖から眞言でありますけれども、實は何も知りませぬ」……といふ風にこちらから聽きもしない内から「何も知らぬのです」といふ、豫防線を張つて掛る、これは男でも女でもみな同じやうである。これは甚だ宜しくないことで、教に對して不熱誠であるが爲に、何か一つ聞かれても返事が出來なかつたら恥を掻かなければならぬと思ふものであるから、モウ聞かれない内に喋つて併るといふやうな態度を執つて居る。さういふ事は大に改めて行かなければならぬ。僧侶と信者の關係といふものは、良い坊さんがあれば隨つて良い信者が出來るのであるが、又反對に信者に良い者があれば、それに刺戟せられて良い坊さんが出來る譯ナンである。假に私が良い坊さんであるとするならば、この良い坊さんが出來た爲にそこに良い信者が出來る。斯ういふ事も勿論言へるけれども、この坊さんが出來たのは私の親が信者であつて、さうして先づ相當の良い信者であつたから、自分が法の爲に盡したいと思ふけれどもさうも行かないからと言ふので、可愛い子供を出家さして「親に代つて本氣でやれ、のらくら坊主になつてはならないぞ」といふ譯で精神を籠めてやつた爲に、良い坊さんが出來たといふことも言へるのである。さういふ風に良い信者があれば良い坊さんが出來、良い坊さんがあれば良い信者が出來るので、どつちが親か、どつちが子か、その關係は容易に言へるものではない。世間ではたゞ一概に、坊さんに良いのが無いものだから信者も良いのが出來ないと言ふけれども、これはちようど鷄といふものは卵から生れたか、卵が鷄から生れたかといふ話のやうなもので、卵は鷄に依つて生れたものに違ひないけれども、その鷄は卵から孵つたものに違ひない。どつちが先であるか、卵が無いから鷄が無いのだ、いや鷄が無いから卵が無いのだ……そんな喧嘩をして見たところが實に愚な事である。

ところが今の日本の宗教に對する僧俗の狀態、又一般政治家などの考も極めて幼稚なものであつて、ちようどさういふ愚な問答を繰返して居るのである。どうか左樣な非論理な幼稚な考を切棄てゝ、諸君の家庭に於ては今申した通り絶えず教の意味合を語合ひ得るやうな家庭を造り、又良き信者があるが爲に良き法師が出來るやうに、必しも自分の子供を坊さんにしないからと言つても、信者に確かりした人間があつて教を聞くやうになれば、坊さんの方も勉强しなければならない。いゝ加減な事を言へば「和尚さん、あまり間違ひが酷いではありませぬか、少しは辛抱するけれども、初めから終ひまであなたの說教は間違つて居る、そんな事でどうしますか」とやられゝば坊主の方でも吃驚して本氣にやり出すといふやうな譯のものである。ところが東京違りの檀家であると、教の話でも始めようものならば「そんな事はどうでも宜しうございます、まアいゝ加減の所でやつといて下さい」……といふ連中ばかりで、何人檀家が來ても坊主から教を聞かうといふやうな者は一人も來はしない「效の良い所を程よくチョイとやつて置いて下さい」などといふ、實に悲しむべき狀態である。これは誰が善い惡いと言ふよりも、斯ういふやうに一般が頹廢をして、結構な教があるにも拘らずこれを玩味しないといふことは、所謂養の山に進入つて手を空しうするやうな譯であるから、隨喜見聞恒に主伴となつて、僧俗の關係に於ても、家庭の關係に於ても、教といふものを共々語合つて發達するやうにしたいと思ふ。

曾は『一代大意鈔』に今の話に續いて

『若は取り若は捨つ、耳に經て緣と成る。或は順ひ、或は違ふ、終に斯に因つて脫す。』

といふことがある、これは實に愉快な事であつて、左樣にして教を語合ふ場合に於て、これは結構だと思つて、その事を取り、或は有難いと思へば、それに順ふ人もあり、又その人の考が惡くて、そんな事はつまらぬと思つて捨てゝしまひ、或はその教の意味に反對する人もある。併しその順ふ者も反對する者も共に廣大なる御利益を得て行くのである。順ふ者は無論救はれるし、違ふた者も遂にはそれが逆緣となつて救はれるものである。これは妙樂大師の語であるが、この意味合を日蓮聖人は强くお考へになつて、必しも信ずる人ばかりではない、信じない者でも耳に觸れて覺ければそれが遠き菩提の緣となるといふことに依つて、盛に教の傳道に力を盡されたのである。諸君も力に應じて人に教の話をして、その人が感心して呉れゝば無論結構であるけれども、感心しないやうな顏をしたからと言つても決して力を落すことはない、これは遠き菩提の緣を結んで居るものである。この人時來らずして如來の正法に感激を持ち得ないけれども、一たび彼が耳に觸れた事は遠き菩提の緣となつて、後年必ずや彼はこの教に依つて救はれるものであるといふ信念を以て行きさへしたならば、如何なる場合に教の話をしても少しも自分に於て心持を惡く感ずることはない譯である。教を語るに就てもこの信念を以て當らなければならぬと思ふ。つづく

立正安國論講話

（第三講承前）

小林一郎

善い教が弘まつて居れば、つまらない教の弘まるわけがない。さういふことはよく考へなければならん。だからどうしても兩立しません。善い教が弘まれば惡い教が勢力を失ふ。惡い教が弘まるのを故つて置けば善い教はその妨げを受けるのであるから、いつでも努力しなければ教といふものは弘まりはしないのである。

次に『捨難の心を生じて』といふのは、つまらない教が弘まつて居ると、善い教を捨てよう。ほかのものは要らないといふ心持が起つて來るのであります。さうして『聽聞せんことを樂はず』つまらない教で滿足して居る人は、勝れた教などは聽くことを願はない。それは願はない筈です。正しい教といふものを信ずるには骨が折れるからです。それは佛教ばかりではない、どんな教でも善い教といふものは信ずるのに苦しいのです。我慢をして居て朝寢や晝寢をして、懶手をして居て金が儲かるなんていふやうなのは善い教ではない。善い教といふものは、お前の行ひを慎め、お前の行ひを清らかにせよといふ教でありますから、さういふ教は信ずるのに骨が折れるが、間違つた教は骨が折れない。何でも構はない、朝寢しても、晝寢してもいゝ、酒呑んでもいゝ、坊さんに頼んで金さへ出してお札でも貼つて置けばいゝといふのだから骨が折れない。それでその方に人が行く。その骨の折れない教を信じて居る人は善い教を聽くことを願はない。善い教を聽くことは面倒くさいから、ドウモ迷信といふものが勢力を持ちやすいことは已むを得ないのです。それで餘程努力して教を弘めなければならないわけであります。若し善い教が弘まらなければ多くの者がつまらない教に歸依してしまつて、善い教は聽きたくないといふことになる。また假令聽いても供養する——佛樣の御恩を感じて御禮を言ふとか、これを尊重するとか、讃歎するとかいふやうな心持はなくなつてしまふ。また『四部の衆』といふのは、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、即ち出家、在家の男と女の信教を信ずる人でありますが、さういふ人があつても、世の中ではそれを重んじないし、またそれに供養して、その教の弘まる手助けをするといふこともない。さういふ風になつてだん〳〵と教が弘まらなくなると『我等』といふのは天上界の者、その天上界の者が自分達ばかりでなく、『無量の諸天』天上界に居る澤山の者がこの深い教を聽くことが出來なくなつて、『甘露の味ひに背き』甘露といふのは非常に味ひのよいもので、これは善い教に譬へたのである。善い教を學ぶことも出來ないで『正法の流を失ひ』正しい教も世に弘まらなくなつて來る。さうすると『威光及び勢力あることなからしむ』これは教といふものを學ばない人は威光や勢力はないのです。何故ないかといふと、難難に堪へることが出來ないだから力がなくなる。つまり智慧があつても、金があつても、位があつても、當り前の智慧とか、位とか、金とかいふものは景氣の好い時には勢力を持つけれども、工合の惡い時には役に立ちはしない。金を持つて居たつて、金を失くしてしまへば、この間まで金がありましたと言つても誰も尊敬しない。智慧を持つて居ても、その智慧なり、學問なりが世の中に役に立たなければ誰も尊敬しない。自分の地位でもその通りで、一度失へばモウそれきりの話である。だから正しく信ずることのない人間といふものは威光や勢力といふものはないのです。周圍に依つて始終動かされて居る。景氣の好い時だけ工合が好いのであつて、一たび逆境に立てばその力といふものは失はれるものである。それを言つて居るのです。教が弘まらないと正しいものが皆力を失つてしまふ。自分に信ずる所があれば、世間に誰も自分を尊敬してくれなくても更に驚かん。自分の意見が行はれても行はれなくても、守る所を改めないといふことになりますからその人は非常に強いのであります。さういふ人がなくなると、皆日和ばかり見て、世の中で流行しさうなことばかりやるといふやうなものになつてしまひますですから天上界の者も勢力を失ふといふのです。

それで『惡趣を增長し』惡趣といふのは、地獄、餓鬼、畜生といふやうな惡い方面に墜ちるやうな罪を犯す者ばかりが殖えまして、人間界、天上界の正しい者がだん〳〵減つて行く。さうして『生死の河に墜ち』る。生死といふのは、世の中の變化を言ふ。世の中の變化の爲に左右される者が、生死の河に墜ちた者といふことです。所謂凡夫です。凡夫といふものはいつでも生死の河に墜ちるものです。たゞ生きる死ぬだけを生死といふのではないのです。人生のさま〳〵な差別を生死といふ言葉で代表させたのです。例へば

生死・得失・利害・勝敗

このやうにいくつもあります。これは皆生死なのであります。物を『得』るといふのは生きる方の部類、物を『失』ふといふのは死ぬ方の部類、『利』があるといふことは生きる方で『害』があつたといふことは死ぬ方である。『勝』つたといふのは生きる方、『敗』けたといふことは死ぬ方である。だから『生死』生きる死ぬといふのは人間の眼に目立ちやすいから生死といふことを擧げたのでありまして、世の中のことは皆言へば生死になるのです。嬉しいといふのは生の方、悲しいといふのは死の方といふやうに數へて行つたら十でも二十でもある。それに始終人間が支配されて居るといふことは、所謂生死の流れに墜ちるといふことです。少し景氣が好ければ喜んでしまふ。少し景氣が惡ければガッカリしてしまふ。儲かれば贅澤をするし、損をすればガッカリするといふのは皆生死に支配されて居るのであります。さういふ支配を離れなければ人間の一生涯といふものは少しも平穩になることはない。世の中は始終變化するから、いつでも都合の好いことばかりあるものではない。ですからさういふやうな教も道も辨へない凡夫は生死の河に墜ちるといふのであります。それから『涅槃』といふのはさういふ利害とか損得といふものの支配を受けないでそのやうなことの爲に心が惑かれないやうになつた狀態であります。その『涅槃の路』に背くやうになつて來る。そこでさういふやうに教が弘まらなくなつて仕樣がないから、さういふ者は天上界の者も護らないといふのであります。

世尊、我等四王、並びに諸々の眷屬、及び樂叉等、斯の如き事を見て、其の國土を捨てゝ、擁護の心無けん。但我等のみ是の王を捨棄するにあらず、必ず無量の國土を守護する諸大善神あらんも、皆悉く捨去せん。既に捨離し已りなば、其の國當に種々の災禍有りて、國位を喪失すべし。一切の人衆、皆善心無く、唯惡緣・殺害・鬪諍

のみあつて、互ひに相讒謗し、枉げて無辜に及ばん。疫病流行し、彗星數出で、兩日並び現し、薄蝕恒なく、黑白の二虹、不祥の相を表し、星流れ地動き、井の内に聲を發し、暴雨惡風、時節に依らず。常に飢饉に濟うて苗實成らず。多く他方の怨賊ありて、國内を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地所樂の處あることなけん。

「世尊よ」といふのはお釈迦様に向つて言ふのです。「我等四王」これは四天王といふのが天上界のいろ〳〵な神の中で殊に優秀な神でありますが、その四天王達も佛教の弘まらない國は護らないといふのであります。これは印度の古い昔からの一種の信仰でありますが、佛教の起らない前から斯ういふことが印度では信ぜられて居りまして、このいろ〳〵な天上界の神の中で一番勝れた神が所謂帝釈天であります。「天」といふのは神のことです。印度では神が澤山ありますが、その神を皆「天」と言ひます。このほかにも例へば聖天様とか、大黑天とか、辯財天とか日本でも知つて居ますが、これは皆印度の神であります。この澤山の天の中で一番勢力のあるのが帝釈天です。これを今の印度では濕婆と言ひまして、印度に行つて見ますと、印度の婆羅門教の信者の多い所では必ず濕婆を祭つて居ます。ビツタリするやうな恐ろしく立派な殿堂がありますが、そこでは濕婆即ち帝釈天を祭つて居ます。私も印度を方々歩いた時、濕婆の祀つてある堂に行つて見ましたが何れも立派なものでありました。その帝釈天が總ての物を生み出したのであると印度の人には信じられて居るのであります。また人間界を護るもの、人間界を支配するものと思はれて居る。若し人間に善い行ひをする者があれば、帝釈天がこれに幸を與へるしまた間違つた行ひをする者があれば、帝釈天がこれに刑罰を與へるといふやうなことを昔から信じて居たのであります。ところがやはり帝釈天一人の力で總ての人間を護つたり、總ての人間を支配したりすることは出來ないから、帝釈天を助ける神が四人あるこれが所謂四天王です。これは佛教以前の思想であります。人間界を四つに分けて、四天王がおの〳〵一方づゝを受持つといふやうに考へられて居ます。日本にも隨分長い間の傳說で、文學や何かにも出て居るから序に申上げますと、

東の方を受持つ神を持國天、南の方を受持つ神を增長天、西の方を受持つ神を廣目天、北の方を受持つ神を多聞天、斯ういふやうに考へたのです。この四つを併せて四天王と言つて居ります。この多聞天といふのが梵語では毘沙門と言ふのです。これだけはどうしたものか梵語の方が有名であります。毘沙門といふのは漢譯すると多聞といふことになる。ほかのは梵語が餘り人に知られないで、多聞天だけはどういふのか毘沙門と言つて有名であります。兎に角東京あたりでも毘沙門様と言つて居ります。神樂坂の毘沙門と言へば分るが、多聞様と言つても分りません。また金刀比羅様と言ふのも同じです。金刀比羅といふのは、やはり毘沙門のことなのです。讃岐の金刀比羅様などは有名ですが、金刀比羅様だけはいつの間にか神様と一緒に祭つてある。（次號）

本佛の宗教

（綱要四）

河合渉明

一、諸宗の批判と開顯（承前）

佛教哲學史上、古今の難問題たり、否、東西を通じて人文思想史上の根本問題たるところのものは、宇宙根柢と宇宙目的との二面の區分と統一の問題であるといふことができる。これを西洋哲學史上に見るも、かの近世自我思想の發明として「自然の律法者」としての自我の意義・人格の權威を發見したるカントの認識論、いはゆる理性の批判的自己考察といはるゝ理性批判の哲學を始めカント以後に陸續として發出したるフイヒテ・シエリング・ヘーゲル等の精神的形而上學といふ燦然たる一系列の諸思想においても、この根本問題はついに解決せられず、といはんよりは寧ろ未だかくの如き區別をすらなほ彼等は自覺し得ないのであつた。カントを始め彼等の齊しく一樣に關心の最大對象たりしところのものは「この宇宙の最後の統一者たる理性者とは何か」といふことであつたが、かゝる宇宙の理性的統一者といふ概念について、その原理面と現實面あるひは本質面と事實面といふ二箇の必須的分折と綜合は、つひに彼等において充分に自覺せらるゝ所なくして終つたのである。續つて現代哲學においては如何。現代は實在を歷史的世界として把握するに至つたのであつて、かのカント等がまづ自然界を第一の對象としたると異り、そこに一段の進歩を見ることができるのであり、實在が一層具體的なる相とくに人格的なる相において把握し考察せらるゝに至れることを意味し、それはカント以後とくにヘーゲル等においてこの發端を見るべきものであるが、しかしその現代にいはゆる歷史哲學においても、また實存哲學においても、ないし人間學等においても、依然として人間存在の根本問題すなはち生命實在の問題およびその究極目的の問題はたまたまその目的達成の可能性および方法の問題等の如き純然たる形而上學的問題については、明確なる解決の光明が投ぜられてゐない。かくの如き諸問題を、まづ第一に人間理性の問題その理性能力の認識および實踐の問題として、人間學的立場より考察すべきであると同時に、さらに廣く客觀的にまた深く自己の存在の根柢に省みて、宇宙（コスモス）といふ一種無限の範疇より把握するとき、この宇宙構造における基礎的本體と價値的建設との二面を予は宇宙論（コスモロギー）における宇宙根柢と宇宙目的と呼ぶのであるが、さらに第三にこの主客二面よりする究極の理念的實在すなはち超人格的絕對者たる神の問題・神の學すなはち神學（テオロギー）または目的論（テレオロギー）としては、神の根柢と神の現實との問題と呼ぶ。而して佛教においてはこれを眞如と本佛の問題といひ、もし又この二面を唯だ一つの佛身概念において表現するならば、これを法身常住と報應驗本との問題といふ。而して又これを予の本有體系において論ずるならば、す

なはち唯だ一の本有概念の中において、予はこれを無作本有と無始本有との問題と名くるのである。すなはち一は非人格的なる超個人的原理と、一は超個人的なる大統一的人格との差別および究極統一の問題であるのである。然しながら、否むしろ、然も、この根本的關係を解決せんがためには、かゝる非人格と人格といふ理・事二面の極と極との間に、その必須の媒介原理、すなはち前者より後者への生成發展原理あるひは成立過程として、必ず因果といふローヤルロード(王道)を通過し經過せねばならぬ。然らずんは實在の眞理に適はず、畢竟して獨斷の神たるの譏を免るゝことはできないのである。

然るにこの根本原則は佛教においては、果然、眞言門によつて破却せらるゝに至つた。由來、佛教は世界人文史上、徹底的にかつ典型的に眞理を重んじ、理性の根據に立ち、論理的にも倫理的にも、哲學的にも道德的にも、いはゆるカント的なる純粹理性上にも實踐理性上にも、宇宙の大法則たる因果の理法に則つて、その知行二回における反省と推理を行使するのであつて、ゆゑにその實在認識と目的達成とのための、純粹および實踐といふ如き二面を綜合したる唯一の理性の指針（カノンまたは進路）を予は正しく名けて「本有」と呼ぶのであり、こゝに本有體系を組織構成するに至るのであつて、かくて佛教は典型的なる理性宗教であるといふべく、したがつてまた由來、佛教は因果教なりといはるゝ程であり、根本佛教たる四諦・十二因緣說等より、大乘發展佛教の極致に至るまで皆然らざるはないのであるが、俄然大乘門の一隅に立つ眞言密乘は、この佛教原則をつひに蹂躪し去るに至つた。

これそも〳〵何の故ぞや、他なし唯だ實に本佛實在の問題かわからず、眞如と本佛との根本關係がわからず、絕對概念における論理的本體と價値的現象と、理常と事常と、非人格と人格と、根柢と完成と、本質と事實と、原理と現實と、先驗と超驗と、可能と全能といふ如き、二大根本的實在論上の面と面とが、つひにわからずして、この二面を全く雜糅混淆するに至り、したがつてその理常と事常との間の必須的榮機たる事成すなはち因果、いはゆる因果は觀念と實在との機樂なりといはるゝその因果：nimittaｐｒｏｔｏｐａｔｈａ 通過せねばならぬ因果・經過せずしては目的地に達し得ざる因果の大法則・因果の大道・因果の王道を、つひに破却し去るに至つたものであるのである。しかもこの眞理破壞の大惡魔を惹起せしめたる元凶こそ、世間的のいはゆる智者にしてしかも出世間的佛門の叛逆者たる眞言の弘法その人であるのである。學佛の君子、片々たる我見・執見に囚るゝことなくして互觀復觀せよ！

すなはち彼が崇々たる元品の無明夢裡、毫も法華本門壽量顯本の眞意を解し得ず、なかんづくこの一切經中最大の秘音としての法華經中無比の難解の敎詔たる

我本行菩薩道、所レ成壽命、今猶未レ盡、復倍二上數一

といふ一文に躓くや、俄然佛教の根本的不可侵原則たる因果の原則を破却して、この經王法華の哲理と敎權を蹂躪し――日蓮の評するが如く、「弘法は誓者なるが故に一を三と讀む、日蓮は愚者なるが故に一を一と讀む」――法華を貶して第三戲論といひ、釋尊を蔑んで無明の邊域といふが如き、空前の誤妄を佛眼と佛說に

さしはさみ、所謂凡夫本覺の異端に權して、ために佛教史上未曾有の波瀾を濫發せしめ、この際に倣へる台密の慈覺・智證が、同じく大日を擧げて理同事勝といひ、權經を攝して密勝顯劣といふが如き、その理といふは固より法性實相の眞如を指すのみ、その事といふは何ぞや、けだし未だ眞の本佛を知らざるものが眞の本佛を指し得る筈もなく、その事といふは印・眞言といふ如き低劣なる形式の末を指すものたるのみ、何の尊貴なるところか之有らん。かくして彼等は一たびその悉源に沒落するや、眞にかの二經すなはち法華と大日との、權實本迹といふ多面にわたる宗教哲學的內容に深甚なる洞察を拂はず、又たとへこれを拂ふともつひにその難問を解決し得ずして、ためにいはゆる雅意の浮言を弄しつゝしかも實際は稚劣なる見解に陷り、その敎相においては本末を顚倒し、その事相においては倍的所轉と化し去り、しかもみだりに新野の權力階級に阿附し結托して、その極、皇朝史上にも深甚なる惡影響を及ぼすに至れるが如きは、まことに愼むべく寧ろ愼むべき事柄といはなければならぬ。もしそれ眞の事理俱密といはゞ法華本門の久遠實成こそ事なり、二乘作佛は理なり。しかるに彼等はたゞ、由來、實在根柢論として深遠なる宇宙本體論を展開したる法華經實相の迹理に對し、宗教の附屬物として末の末たる兄術的形式を勝れりとなし、況んやたえて眞正戲密なる本佛事圓の圓慈觀を知らずして、ためにつひに權實・本迹・因果・修證の綱格をこゝに全く紊すに至り、勢の趨くところ、佛教正統たりし法華經中心の敎義見想も、慈覺・智證が眞言に陷つてより後、五大院安然は禪に傾き、慧檀兩流は淨土に走り、やがてつひに諸宗おの〳〵分流獨立するに至れるも、未だ曾てその正統を復活してこれを大成するが如き一大偉人と敎學を生まず。つひに本化別頭の蓮華として佛教統一の法幢たり、はたまた國體闡顯の國師たる我が日蓮大士に至つて、驚然として長夜の夢を醒まさしめらるゝに至つたのである。たゞさりながら是くの如き一切に對する批判・闡顯・統一の一大完全說に達するには、幾多の敎理的難關を踏破して、其によつて始めて、思想界の絕巔たるヒマラヤの王峯を極むるに至つたものであることを知らねばならぬ。

南無妙法蓮華經　紀元節の翌日

記事

本部關報

奏行會　正月六日に始つた奏行會も二月四日に目出度く終つた。その間三十日和賀先生並に機部先生には御不自由な中を早朝から御熱心に導師をなされ、法華經一部八卷の浩瀚な聖經を詳細に拜讀戴き得たのは感激に堪へなかつた。このやうな兩先生の過歷の下に營まれた必勝祈願の奏行會は幾多の大きな成果を收めた。今年の奏行會程多數の皆勤者のあつた奏行會は從來なかつた。

大詔奉戴日　この月の大詔奉戴日は奏行會賞狀の授與式を兼ねて多數の參詣者があつた。嚴修後和賀先生の猶感想は頗に悲壯であり一同を感憤せしめるに充分であつた。先生のお話の後池田代表の答詞あつて感激深い奏行會の證書授與式をもつて大詔奉戴日は終へた。

開館十二年紀念會　紀元二千六百四年の輝やかしい紀元節の日に

會館十二年の紀念會が和賀先生御導師の下に恭しく營まれた。天氣に恵まれたこの日には多數の方々が集まられた。嚴修後磯部先生、河合先生の御法話があつた。

法定圓滿 帝都に於て唯一の純顯本傳燈を堅持し來つた本團は、此の必勝の年に即應の大活躍を試むべく一段と其の刷新强化を期すべきだと、多年盡瘁された上田理事長は深く鑑みる所あつて遂に一月末辭任申出された。理事會は愼重審議の上之を受理し、後任は互選の結果和賀義見氏に委囑し、又教務部員は大なる感奮を以て上田氏の高配に酬ゆべく益勇精を期し、磯部氏の如きも十分加養の暇なく二月中旬顯本法華の發祥地たる作州津山を訪ひ、先師の芳躅を偲び近頃顯本正義の衰はれんとするを慨し、愈々内外同志互に主伴となつて健鬪するを誓ふ等、本團教務一同は私を捨てて尊い大使命完遂の一路を辿らんとせること畢竟上田氏の大功績であらう。幸に各位之を諒として最大の御贊助を得法團希ふ。

日曜講演會 小林先生が御異例で休まれてゐられるので土曜講演會がなくなつた事は何といつても淋しい。そこで暫らく休んだ日曜講演會を復活して二月の二十日から開講した。この好機を失せずに御參會を切望する。

月曜會 日曜講演會が午後一時三十分から始まるにかはつて、月曜會は早朝六時二十分から嚴修が始まる。月曜會は主に若い方々が集まり英氣焔のやうた觀がある。また勤修後は磯部先生の小止觀の御講義あり、併せて御參會を熱望する。

福島教信

一月二十九日 磯部先生をお迎へして昭和十九年の初例會を中村様宅で開く、前回に次ぎ方便品第二の御講義を頂く。凡夫の我等も佛と同じものを具へ、本佛釋尊を渇仰する其處にお題目があり、釋尊の無限の慈光に照されて始めて人格の飛躍向上がある。深く因果を信じ、佛は滅したまはずと知つて現在の一時をゆるがせにせず精進すべきである。東京の福岡氏、原田氏、中山氏ら見え盛會であつた。

高齋の方は折惡しく都合急變の爲、次回に讓つた。

團費誌料維持費及寄附金領收

自一月二十一日
至二月二十一日

東京	高橋喜六殿	金五圓也
同	村松菊野殿	金三圓也
鳥取	高田日輔殿	金十圓也
新京	長澤信一殿	金三圓也
福岡縣	大久保久市殿	金二圓五十錢也
横濱	吉村顯治殿	金二圓五十錢也
名古屋	伊藤乙女殿	金二圓五十錢也
東京	山田英二殿	金十圓也
兵庫縣	吉岡アニ殿	金二圓五十錢也
埼玉縣	桑田香苗店殿	金十五圓也
上海	[illegible]村美[illegible]夫殿	金二圓二十錢也
東京	[illegible]田ツ殿	金十圓也
姫路	中島幸男殿	金三圓也
東京	中村文吉殿	金五圓也
鳥取縣	中田宏道殿	金八圓八十錢也
津山	有田顯太郎殿	金十圓也
東京	林太郎殿	金十圓也
千葉	[illegible]部[illegible]夫殿	金二圓二十錢也
東京	磯部むめ殿	金三圓也
同	原井るい子殿	金五圓也
同	金木ち子殿	金十圓也
同	高林一郎殿	金二圓五十錢也
同	小木龜子殿	金五圓也
同	鈴木うた子殿	金二圓五十錢也
同	伊藤夏子殿	

右難有入慢仕候也（以是領收證代用）

財團法人統一團會計

聖應院日生上人第十四周年忌報恩會を左の通り
可相營候間隨宜御參詣相成度候

一、三月十六日（御祥當）午後一時（時間正確）
於本部法要

一、同　午後三時　於妙國寺
展墓

以上

財團法人　統一團

注意　時節柄一般的ハガキ案内は省略することあるべし。

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢｝送料共
一ヶ年　金貳圓貳拾錢

注意
○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
○御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共ニ御通知ノ事

昭和十九年二月二十五日印刷納本
昭和十九年三月一日發行
（第五百八十八號）

不許複製

東京都小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京都四谷區内藤町一
印刷人　山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
東京二〇五二

東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

一統

第四十九年四月 臨戦號

佛眼を借りて時機を考へよ

今末法に入て二百餘歳、大集經の「我が法の中に於て鬪諍言訟白法隱沒の時に當れり。佛語實ならば定めて一閻浮提に鬪諍起るべき時節なり。……鬪諍堅固の佛語地に墜ちず、宛かも是れ大海の潮の時を違へざるが如し。是を以て按ずるに、大集經の白法隱沒の時に次で、法華經の大白法の日本國並に一閻浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。

後の大集經は佛說の中の權大乘ぞかし。生死を離るる道には、法華經の結緣なき者の爲には未顯眞實なれども、六道四生三世の事を記し給ひけるは寸分も違はざりけるにや。何に況や法華經は、釋尊「要當說眞實」と名乘らせ給ひ、多寶佛は眞實なりと御判を添へ、十方の諸佛は廣長舌を梵天に付けて誠諦と指示し、釋尊は重ねて無虛妄の舌を色究竟に付けさせ給ひて、後五百歳に一切の佛法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字を持たしめて、謗法一闡提の白癩病の輩の良藥とせんと、梵帝日月四天龍神等に仰せつけられし金言、虛妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頹落すとも、春の後に夏は來らずとも、日は東へ歸るとも、月は地に落つるとも、此事は一定なるべし。

欽明より當帝に至るまで七百餘年、未だ聞かず、未だ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと勸人を勸め、我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星隱る、賢王來れば愚王滅ぶ、實經洗布せば權經の止まり、智人南無妙法蓮華經と唱へば、愚人の此に隨はんこと、影と身と、聲と響との如くならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事敢て疑ひなし、これを以て推せよ、漢土月氏にも、一閻浮提の內にも肩を並ぶる者はあるべからず。

悅ばしきかなや、樂いかなや、不肖の身として今陵心田に佛種を植えたること、よ。南無妙法蓮華經。

——日蓮聖人、撰時鈔——

日蓮聖人の慈訓

本多日生

三、器の四失

『秋元鈔』といふ日蓮聖人の御書に信心の事に就ていろ〳〵懇切なる聖訓があつて、器に譬へて、信心に四つの失のあることをお示しになつて居る。器が覆へる場合、或は漏る場合、汚れる場合、雑り物のある場合に於てはその用を成さないやうなものである。この器といふものはお互ひ人間の心なり身なりを譬へるのであるが、佛の結構な教に出會つても耳に蓋をしてこれを聞かないとか、信心しないとかいふのは、器が覆つて居るやうなものである。幾ら水を注がうとしてもコップが伏きになつて居れば水は入らないが如くその人の心が覆つて居るものである。或は一旦信じても惡緣に出會つて、誰かゞ佛教の惡口を言つたとか、信心を嘲つたとかいふことの爲に、その人の心弱くしてそれを棄つやうなことになり、或は何とはなしに世間の俗事に心を奪はれて、信ずる日もあるけれども忘れる月があるといふやうな譬で、一日信じて一ヶ月忘れるといふやうなことから、次第々々に氣が抜けて行くやうな信者は、器の何處かに孔が穿いて居つて、一旦入れた水が漏つて行くやうなものである。又法華經の信心をしながら他の信仰を混ぜるといふものは、それはちようど飯の中に砂を入れたり石を混ぜたりするやうな汚れたものであつて、洵に悲しむべき事である。世間一般の人は何でも御利益のありさうな事をいろ〳〵やるのが宜いやうに思つて居るけれども、信仰はさういふものではない。恰も王様のお妃が王様の嵐を宿して居られる場合に、或る臣下と交りをしたならば、王の嵐か臣の嵐かわからなくなつて天にも見捨てられるやうなものである。父二人あらば王にもあらず民にもあらず、人非人である。その如くに法華經の大事といふのはこの點である。本佛釋尊を信じたる者は、その中心の信仰といふものを動搖させしむべきものではない。それを動搖させていろ〳〵のものを信じたりするのは、御飯に砂を混ぜるが如きものである。斯樣に「覆」と「漏」と「汚」と「雑」といふ四つの失を免れて、始めて正しき信仰といふことが言へると仰せられて居る。これは有名な秋元鈔の慈訓であつて、所謂法華氣質といふものはこの四つの譬の中から出來て居るのである。

又『日妙鈔』といふ御遺文に結構なお示しがある。この日妙といふのは乙御前といふ可愛い娘の母親で、佐渡ヶ島まで日蓮聖人御流罪中にお見舞に行つた婦人である。男の人はまだ誰もお訪ねしないのに、この乙御前の母は遠々遠倉から十四歳の娘を伴れて佐渡ヶ島に、日蓮聖人がどういふ風にお暮しになつて居るか、気になつて仕方がないといふので訪ねて行つた。日蓮聖人はその海を非常に賞せられて、日妙といふ聖人號を贈られた有名な婦人である。これが後に富木常忍守の妻となられたのであつて、六老僧の日頂上人の母親に當るのである。今自分の住職して居る品川の妙國寺は妙國尼といふ方が建てた寺であるが、この妙國尼のやはり母親に當る、その日妙女に與へられた日妙鈔といふ御書に婦人の事に就ていろ〳〵教へられて居る。一通り女の心といふものは頼りにならぬものだといふことがいろ〳〵の書物に書かれて居る、女の心は水の上に字を書くやうなものであつて、直ぐに消えてしまふとか、女は狂人じみたものである。或は女の心は川のやうなもので、山から海まで眞直に流れて居る川は無い、その如くに女の心は曲つて居るとかいふやうなことは普通世間で言ふのだけれども、この法華經は正直なお經であり、柔和なお經であつて、法華經を信ずる女人はこれと異なる、（そこが婦人の最も強く感じなければならぬ所である）法華經は正直なること弓の弦を張りしが如く眞直である。他のお經は結構だけれども、法華經から見たならば足らざる所がある。然るに今あなたは法華經を信ずることになつた。全く正直な人であり、眞實の女人である。須彌山といふ大きな山を小脇に抱へて海を渡る人はあつても、あなたのやうな尊き女人を見ることは出來ない。砂を蒸して飯にする人はあつても、あなたのやうな尊き女人は無い、定めし釋尊始め諸天善神も、影の身に添ふが如くにあなたをお守護爲さつて居るだらう。あなたこそは日本第一の法華經の行者の女人であるといふことが言へる。それ故に不軽菩薩がすべての人は皆菩薩なりと言つた意味から考へて、あなたは女人であつてまだ髪も剃つて居ないけれども、併し日妙聖人といふ尊號を贈りたいと言はれた。この人は有髪の僧聖人號を與へられて、その後に富木常忍守の所に嫁入つた譯である。さういふ風にこれからお嫁に行かうといふやうな人に日妙聖人といふ尊號を贈られた。日蓮聖人はさういふやうな形式の如何を問はずして、普通の女であるにも拘らず法華經の信仰強くして、日蓮聖人を佐渡ヶ島に訪ね行かれたその志が徹底して居ることに對して感激を以てこの名前を贈られたのである。この世間一般の女は曲れる河の如しとか、狂へる人の如しとか言はれて居ることを切棄てゝ、正直なること弓の弦の如しといふ風に法華經の行者たる女人を讃められて居ることを深く心に銘じて、法華經を信ずる女人は最も強く正しき信仰を貫い行てきたいものと思ふのである。

× × × ×

國と教

小林一郎

お釋迦様のお考に依れば、たとへ天上界の安樂な生活をして居るからといつて、それが決して幸福ではない。これもいつかも申したのでありますが、人間は用が多いから世の中の用のないのを望むし、苦勞が多いから苦勞のないのを望むけれども、苦勞もなく、仕事もなくボンヤリして居つたら、そんなつまらないことはない。何か用が欲しいと思ふのが當り前である。だから天上界の生活といふものは、決して人間の理想的の生活ではない。本當に世の爲め、人の爲に滿足を感ずるといふのが生き甲斐のある生き方で、たゞ無事泰平を望むといふことが本當の生き方ではないといふことを佛教では強く言はれた。それから人間界ばかりではない。天上界の神でも佛の教を學ばなければならんといふ思想が發展して來たのであります。それが經典の中に言葉になつて現はれて來たのであります。人間が佛の教を守れば、天上界の者もこれを護る。一緒に助力をする。人間が佛の教を守らないならば、天上界の神も見捨てゝしまつて護りはしない。モット進んで強く言へば、人間の目を醒まさせる爲にそれに禍ひを下して、これを覺醒させることもあるといふやうな思想は非常に大きい思想であります。即ち天地の間にある命のある者は皆教を守らなければならないといふことなのです。たゞ安樂な生活といふものがチットモ

であります。だから金光明經中に四天王が、モウさういふ佛教の行はれないやうな國は護らない。自分達も見放してしまふぞといふことを言つて居るのであります。

またこれもつけたりのことかも知れませんが、少し奇妙な、滑稽な話もあるのであります。印度の昔の言ひ傳へですが、持國天增長天等が、この人間界を見て歩いて、人間の善い惡いを見分けて帝釋天に報告をする。さうすると、帝釋天がその報告に依つて或る者には幸ひを與へたり、或る者には禍ひを下したりするといふことが信じられて居つた。無論佛教以前の話であります。ところが四人の天王が始終廻つて歩くのではなくて、時々廻つて歩くのです。何を本にして決めたのか分りませんけれども、一日と、十五日と、二十八日に廻るといふのです。この三日を特別な日にしてしまつた。その日は見に來られるのであるから、成るべく見つともないことをしないやうにといふわけです。さういふマアつまらない思想で、見られる時だけ慎んで、平生はどうでもいゝといふのでは困るけれども、マア人間の習はしで、そんな思想が發展して來たのです。それで一日、十五日、二十八日は成るべく行ひを慎むといふことになつた。それが支那に傳はつて、日本にも傳はつた。日本では今はさうでもないが、吾々が子供の頃はお三日と言つて、一日、十五日、二十八日は特別の日になつて居つた例へば商人の店などで、ドンナ吝な主人でも、お三日だけはひじきに油あげだけでなく魚ぐらゐは食はせる。さうすると、あの主人は慈悲がある。情深い人であると見られて、大いに儲かるであつて特別の日になつて居つた。この頃ではなくなつたが、妙に國の風俗習慣といふものがドウモ古いことに執を持つて居るといふことがこの一例でも分るのであります。だから一度善い事をしたならば、その善い事はやはり消えるものではなし、一度惡い事をしたらそれは消えるものではなし、いつの間にか後の世までも何等かの影響を及ぼすものだといふことを考へるのであります。さういふわけでありまして、今の四天王といふことも、印度ばかりでなく、支那、日本に亙つても隨分考へられて居るのであります。その四天王が佛教の弘まらない國は見放すぞといふのであります。

それから『樂叉』といふのは、これはもとは空を飛び廻つて人間に害を爲したもので、惡魔のやうなものであるけれども、これが佛教を信じて、佛に歸依して、佛の教の弘まることを護るやうになつたといふので、その樂叉なども佛教の弘まらない國はこれを捨てゝ『擁護の心無けん』即ちこれを護らない。たゞ『我等のみ』が佛教を信じない爲政者を捨てるのみならず、無量のその國を護るところの善神もやはり捨てるであらう、皆悉くが捨て去るであらう。その國々には特別に國を護る神といふものがあるが、その國を護る神も爲政者が心掛けが間違つて居つては、政治が間違つて來る。隨て人民の風儀も亂れて來るといふことで、見込がないからそこを捨てゝしまふであらう。その神さへも捨てるやうな狀態であるならば、その國に種々の災難があつて、結局主權者はその地位を失ふやうにもなるであらう。それで一切の人間が皆『善心』がなくなるから、そこで『繫縛・殺害・瞋諍』即ち互に人に害を與へたり人を損ね合つたり、殺し合つたり、或は相爭ふといふやうなことになつて來て『互ひに相讒謗し』ほかの者の惡口を言つて、ほかの者を陷れるやうになると、『狂げて無幸に及ばん』で、罪の無い者までも惡道へを食つていろ〳〵な災難に遭ふやうになるであらう。またさういふ時代に於ては疫病が流行つたり、彗星がたび〳〵出たり、太陽が二つ並んで出たり、或は太陽や月が薄くなつて、日蝕や月蝕があつたり、黑い色や白い色の虹が出て世の中が亂れて行く姿を現はし、星は流れ、地が動き、地震がある。或は井戸の内には物の響きの聲が聞えたり、風も時節を構はず吹き荒れたりして、遂に時節といふものの區別が立たなくなつてしまふ。さういふ風に氣候が亂れるから飢饉も起つて苗も弱つて行く。隨て實も出來ないといふやうになる。國が斯ういふやうに弱つて來ると、その弱づたのに付け込んでほかの國の者が兵を起して、その國に攻込んで國内を侵略するといふやうなことになつて、人民はいろ〳〵な苦しみを受けるであらう。さうして何處でも樂しむべき所がなく、その國中が皆亂れ荒れて、人民は生活の安樂を保證されるといふことがないであらう。斯ういふことが金光明經の中に言つてある。これに依つて見ると、國に正しい教が行はれなければ天災地變があるといふことは明かである。その天災地變があつても、それでもまだ用心しないで居ると今度は他國が攻込んで來るといふことは、この經文の本文に基いて推測することが出來るといふことを日蓮聖人は叫んで居らるゝのであります。

本佛の宗教（綱要五）

河合陟明

一、諸宗の批判と開顯（承前）

今、如上、天台・華嚴・眞言いはゆる天・華密三門を代表的なる學問佛教として概評するに天台は根源的實在論たる法性論においては典型的なる深遠精緻の認識と實踐を生み、たゞ建設的實在論たる佛陀論においては一大剩餘領域を殘したものである。但し法性論の發展が必然に佛陀論となり、法身論上の嚴密推理が必然的に報應二身の事成にして事當なる、かつしかも一大完結的統一體系としての本佛といふ實在概念に達せずんばやまざるものであるとするならば天台の法性論すらも亦未だ完璧とはいはれざるものなることを知るべきである。すべて思想批判には與奪二面が存することを知らねばならぬ之に反し、華嚴は法性の本質論上における具體的內容を審かにせず、根本實在の體系的組織すなはち無作本有の實在の論理的構造を明かにせず、とくに個性原理において不明を免れず、而して佛陀論上に來つてもまた勿論これがために不明混亂を脫せざるに至つたのである。いはゆる、問、唯心法界、以論レ妙、一念法界、以立レ行者、如何。答、是雖二高尚一未レ見二實相一也、以二界如當住、未レ聽故、以レ歸二唯識一相故、譬二幻造無常空理一。（日輝、一念三千論、卷一）これすなはち華嚴および法相唯識等、別教但中ないし權大乘の性相二宗を破する的文である。（但しかく評破せる日輝もまたつひに眞の本佛を解せず、華密の二家と相去る遠からざるに終つた！）しからば眞言は如何。彼は法性論・心性論・本體論・本質論が直ちに佛陀論・多神論・價値論・現實論とみなされ、この根本的二面の別がもはやつひに喪失され、ブルンナーのいはゆる限界構取を敢てして、超越と內在との雜種混血兒・畸形兒が生まるゝに至つたのである。彼にあつては二面共に全く混亂雜糅し果つるに至つた。

しかもこの偏をなせるものは他なし既に華嚴家にあつて存するのである。彼が佛陀の形而上的個性現象と眞如の形而上的普遍本體とを、共にたゞ一箇の形而上的實在として、否もちろん其は共に形而上界に屬して形而上的實在なのではあるが、しかもまさしく兩者が共に形而上界に屬するがゆゑに、これを混亂し、否、とくに佛陀の個性的人格實在なることを知らざるがゆゑに混亂し、本體界としての眞如界と價値完成界としての佛界とを同置するに至り、したがつて眞如本體界上における、或はいはゆる眞如海中における個々多元の萬有現象、すなはち九界迷者の迷妄現象——何となれば華嚴家にあつては、本體は卽佛界なれば、現象は卽九界迷者たるの外はない筈である——を、然るにも拘らず遂に或は直ちに、虛空界または毘盧遮那の果上現の現象なり、果上現の法門なり、如來性起の大用なり、極果の佛陀的作用としての價値的現象なりと見るに至り、然り見誤るに至つて、この眞如と佛陀との二面を媒介すべき必須過程としての因果法は、すこぶる意義稀薄となり、殆ど喪失されんとするに至つた。しかるに眞言家に至つては、つひにこの方向にさらに一歩、惡しき一歩を進めて——そも〳〵東西古今を通じて苟くも宗教思想の根本要求たる、然り萬古を貫いて人間本來の宗教的要請たる、神すなはち本佛の無始の人格實在といふことが、因果法を以てしては遂に有始たるを脫せず、眞實在の要求に適はざるの根本理由を以てして、換言すれば實在論上における眞にこの深き致命傷的眞理の問題、云く「實在と因果」といふ根本問題を徹底解決するを得ざりしがために——つひに一思ひに大膽に、否、傍若無人に、佛教の根本原則、否宇宙法界の大法則たる因果の理法を全く無視し蹂躪し否定し抹殺し去るに至つたのである。佛教の命脈はこゝにもはや斷絕せりといふの外はない。後こそ實にその釋迦・大日二佛並立の說において、あまつさへその本末顚倒の說において、はたまた因果否定の思想において、倫理的にも論理的にも佛教撫覆の元凶であるのである

ひるがへつて眼を轉じて實踐佛教の代表としての禪淨二門を見るときは果して如何。念佛門は依然として哲學本來の問題たる實在論に關しとくに宗教の根本中心たる佛陀の實在性に關しすなはち彼が超世の悲願として誇る彌陀の佛體そのものに關し、その實在性を根本問題として橫たへてゐる。それを實體と影現との問題といふべく而して結論は影現たるに過ぎぬ。何となれば彌陀の佛體もまた未だ嚴密なる完全實在としての意味を說明し得ず。その佛格は報身その實在は有始なる點においては、時間範疇上天台に屬し、その佛身の實在の樣式は無相にしてたゞ光明身のみといふ點においては、空間範疇上華嚴別教に屬し、その時間的有限性を免れんとして說ける十劫久遠・本師法王說は、六八の本願と常住の事理との因果關係を完全に說き得ざる點において眞言門に屬し、かくてその實體はつひに唯理無形の法性一如界に還元する外なきがゆゑに、彌陀とは結局假象的・影現的なるものに過ぎず、畢竟するに佛身觀上における權實論・本迹論の双に倒れ、傳教のいはゆる、有爲報佛、夢中權果、無作三身、覺前實佛といふ眞如絕對論中に滅沒して、また佛身の痕跡をも留めざるに終るのである。

南無妙法蓮華經。

團費誌料維持費及寄附金感謝入帳

（自二月二十一日 至三月二十日）

○十圓　川島清藏殿　○五圓　松本宮子殿　○三圓　片桐德次郎殿　○二圓二十錢　山田健治郎殿　○二圓五十錢　市川通源殿　○五圓　伊藤和歌殿　○二圓二十錢　坂上昭殿　○二圓五十錢　國分文子殿　○二圓五十錢　橋本美芳殿　○十圓　高橋傳殿　○二圓二十錢　坂井日好殿　○三圓　宇野博順殿　○三十圓　柴田武治殿　○二圓二十錢　石黑政次郎殿　○二圓二十錢　中村明法殿　○二圓二十錢　川手海祥殿　○十圓　松本祐一郎殿　○一圓三十錢　本鄕常信殿　○三圓　村田よし子殿　○六圓　菊地雄三殿

團員總會

來る四月十六日午後一時半於本部團員總會を開催昭和十八年度事業並決算報告及び本年度豫算御協定願度候間御出席相成度右謹告仕候

財團法人　統一團

一統

第四十九年六月 信樂號

發心の功德

爾の時に天帝釋、法慧菩薩に白して言く、佛子よ、菩薩初めて菩提の心を發こさば所得の功德其の量幾何ぞや。法慧菩薩言く、此の義甚深にして說き難く知り難く分別し難し、然りと雖も我れ當に佛の威神の力を承けて汝が爲に說くべし。

菩薩初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發こす功德善根は、能く其の際を知るを得る者有ること無し。佛の威力を承け即ち頌を說いて言さく、

世間を利せんが爲に大心を發こさば其の心は昔く十方に偏せん
衆生を慈念して暫捨する無く　諸の惱害を離れて昔く餘怪す
菩薩一たび最上心を發こさば　悉く能く往詣して皆礙無けん
佛の境界に於て信心を起し　佛の灌頂を得て心に著無く
兩足尊の所に恩を報ぜんと念じ　心金剛の如く沮るべからず
妙道を志求して蒙塵を除き　法界に周行して旁を旁げず
諸の分別を離れて心動ぜず　善く如來の境界を了り
三昔の疑網悉く已に除こり　如來の所に於て淨信を起し
信を以て不動智を成ずるを得　智淸淨なるが故に解脫實なり
信心不動なること須彌の如く　昔く群生功德の藏と作る
菩薩の發心功德の量は　億劫に稱揚すとも盡すべからず
過去未來及び現在　所有の劫數は過量無し
此の諸の劫數は聲は知るべきも　發心の功德は能く測ること無し
菩提心は是れ十力の本　亦四辯無畏の本たり
十八不共も亦復然なり　皆發心より得ざるは莫し

—華嚴經—

統一　昭和三十年十二月二十四日　第三種郵便物認可
昭和十九年三月二十七日印刷納本
昭和十九年四月一日發行
第五百八十九號

本部團報

○日蓮門下に於ける長老たる歷史を有せる我が統一誌は、過去五十年に亙つて本多學系により昔く天下に純正日蓮法華の生粹正義を宣揚し國民敎化に寄與する處あつたが今こそ更に一大飛躍を試みるべき時に際會したにも不拘、御周知の通り昨今頓に各方面の急轉につれ本誌三月號の知きも遲れて漸くお手許に屆く始末に鑑み、愛に謹く舊套を脫して面目一新、臨戰版に改めて登場することになりました。

○御存じの通り各誌の統合整備が强要されて居り、當方にも勸說される機會が數々ありましたが、併し現在世上に氾濫の大法を護持宣揚し、折伏立存の聖意を體し、その思想信念を如實に敷衍し實行してゐるものがありませうか。本誌は外觀こそ貧弱となつたが、此の純潔な法統擁護の大事に於て道念の合致するものが出現する迄は統一誌は統一として飽迄勇精すべきがお國のためだと思ふ。同感の各位、何卒當法國信徒の御淸援を願り上ます。

○三月五日午後、本部で幹部會を開いて二三の要件を協議致しました。

○三月十六日は、日生上人第十四周年忌に相當するので、午後於本部報恩會を厳修し終つて品川妙國寺のお墓に打揃つて參詣することを得たのは有難い次第であつた。ある人等は厳墓を輕んずる傾向もあるが、これは親門の難信難解で甚だ遺憾千萬に思ふお互ひ强盛に信行を勵んで後悔のないやうに致したいものであります。

○三月十九日より一週間、駿州掛川に於ける文部省敎學局思想課主催の敎化團體指導員錬成に本部より金城氏が參加されました

○日曜、月曜及大詔奉戴日の淸集に就ては事繁き故に省略させて戴きます。

○本多上人の滅後、大法護布のため本團に甚大な御淸援を與へられつゝあつた小林一郎先生は昨冬より御加養中の處、藥石效を奏せず、遂に三月十八日六十九歲を一期として化を他土に遷されてしまひました。寔に惜みても惜み切れない、玆に謹んで御冥福を祈る次第であります。南無妙法蓮華經

福島支部報

餘寒去りやらぬ三月三日、磯部先生をお迎えして大町中村樣宅で例會を催す。

世相は道義の國たる面目を疑はしめるものが多々あるが、道義日本の確立こそ完勝への根底をなすものであらふ。生死このの大海に浮つても卽涅槃と悟り超出する者は幸ひであり、且つ眼に悅ん出來る人であるる等、過迫せる現在の心組みの慈光を頂く。尊意本佛の慈永く生くべき道はないことを思ふ。我等の魂の

三月二十日も同前の知く淸集をなす、春のお彼岸會に因んで、智目行足到淸涼地だから是非大願力を志して菩薩行への精進を誓有聽聞した。當日は春雪霏々、而も多數の來會者あつたことを歎ぶ。

統一　一部 郵金二十錢　送料二錢
定價　半ヶ年　金一圓二十錢　一ヶ年　金二圓二十錢（送料共）

昭和十九年三月二十七日　印刷納本
昭和十九年四月一日　發行

東京都小石川區音羽六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京都四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社